

Viator

VOL.33

祝御降誕祭



小教区の皆様へ

皆様が、楽しいクリスマスをお過ごしになるようお祈りいたします。

北白川教会主任司祭ウィリアム・セルジュ神父
今年もまた、私たちはこの大切な祭りをコロナ禍という特異な条件のもとで過ごしています。し

かし、神が人類に与えた驚くべき贈り物、すなわち御子イエスの光と喜びにあらがうものは何也不会ありません。クリスマスとは、私たちの悲しみや暗闇、心配や恐れを払拭してくれるイエスの神秘であり、喜びと光です。クリスマスとは、世の光であり、私たちの希望であるイエス様をこの日に迎える喜びです。

この幼子イエスが私たちをかくも愛してください、私たちのところにまで来てくださるのです。私たちから何もかも奪うことのできない深い平和をもたらすために、幼子イエスを招き入れましょう。そして天を開き、私たち一人ひとりに、そ

して世界に祝福の雨を降らせてくださるこのイエスを、私たちのもとにまで招きいれましょう。私たちも心を開き、手を広げ、目を開き、困っている人に触れ、喜び、許し、命を与え、分かち合いましょ。私たちの家族のなかに、心のなかに、イエスの光と平和を輝かせましょ。

マリアとヨセフとともにこの喜びに入ろうではありませんか。羊飼いととも喜び躍り、心をこめて歌いましょ。いと高きところにおられる神に栄光あれと。

クリスマスおめでとうございませ。幼子イエスが皆様に幸せと平和、喜びをもたらしますように。

堅信式の感想

ウィリアム神父様の話を聞いて自分が知らなかつた聖書の話をおくわしく知ることが出来た。例えば、三位一体の意味や七つの秘蹟などを深く学べた。堅信式ではどのようにやるのかわからなかつたので少し緊張した。堅信の儀でたくさんの誓いを立てたので、それを守れるよ

イブ F.K. (中学一年生)
うにしたい。堅信式を受けて「堅信は自分の意志でやる」ということもわかつた。今の学校や普段の生活の中でも活かせるように聖書のお話を学んで、神様のことを知って自分も成長していきたい。



11月13日(日)午後、河原町教会での京都南部地区合同堅信式の際の記念撮影。

新役員挨拶

ペトロ・ラファエル T.Y.

2015～16年以來、2回目の役員を務めさせていただきます。ヴィアートル学園洛星中高の卒業生で、高1のとき、ラバディ神父様から洗礼を授けていただきました。シテ方金剛流能楽師でもあり、芸術の秋を中心とした“能繁期”の日曜日にはごミサにあずかることができず、舞台公演と重なれば、評議会を欠席することにもなります。はなはだ心苦しいのですが、公演のないときにはお役に立てるよう、しっかり働く所存ですので、よろしく願いいたします。

セシリア Y.T.

この度、新役員になります Y.T.です。わからないことばかりでご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、温かく見守っていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

ヨハネ K.T.

私は二年間の任期を満了しましたが、神父様から「新しい役員の方とつながためもう一年務めるように。」とおっしゃられたので続投することになりました。この二年間はコロナ禍で、神父様と信者、信者同士の交わり、分かち合いの機会が大きく抑制されてしまいました。2023年は、皆様と力を合せて信仰と交流をより深めた共同体になるよう及ばずながら努力いたしたいと思います。

いつでもお声がけとご協力をよろしくお願いいたします。

ヒルデガルト Y.Q.

この度、カトリック聖ヴィアートル北白川教会の役員に選ばれた Y.Q.です。北白川教会に初めて行ったのは、2014年のクリスマス・イヴでした。その時、清澄なる歌声と信者たちの祈祷の姿に深く感動しました。「地の塩、世の光」「自分を無にして」などの教えに強く惹かれました。あれ以来、自然と北白川教会へ近づくようになり、コロナ禍の最中の2020年夏によく洗礼を受けました。至らない点が多々ありますが、今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

ヨハネ N.N.

教会の奉仕活動を依頼されるとき、快く引き受けてくれる方もあれば、なかなか首を縦に振らない方もあります。どなたにも様々な事情があることを十分にご理解の上で、依頼をすることが多いので、なにとぞ神さまからのお声掛けだと思って引き受けていただければ、ありがたいと思います。神さまからの呼びかけは眠りの中で行われることが多いと、聖書にはありますが、人を通じても様々な呼びかけを行われます。ともに呼びかけにいつも目覚めていることができますように。ふたたび役員を務めさせていただきます。

追悼パードレ・リノ

忘れもしない。2013年6月2日のご聖体の祝日、上洛に際して、北白川教会でのミサにあずかった直後のこと。

私は、当時の主任司祭ポアベール神父様に挨拶

アンナ・マルガリタ M.O. (麴町教会オルガニスト) をした。言葉を交わしてみると、フランス語圏ご出身のポアベール神父様は、私が洗礼を授かったジャック・ベジノ神父様とは旧知の間柄であった。それで嬉しくなり、“Merci! Au revoir!” と別れを

告げ、振り向いたときだ。もうひとりの外国人神父が目の前にいらした。

“Bonjour!”と挨拶すると、大きな明るい日本語で「私はイタリア人です」との返答。私はあわてて、“Buongiorno!”と再度、挨拶。そのイタリア人がまさしく、リノ・ベリーニ神父様であった。そして、さらにこう言われた。

「あなたはよく典礼聖歌を美しく歌っていましたね」。

私はソロで歌っていたわけではないのに、入堂、退堂のとき、そして祭壇から、会衆席の声を聴き分けておられたのだ。少々驚いた。なぜなら、私は現在、東京・四ツ谷の上智大学に隣接する聖イグナチオ麴町教会のオルガニストとして働いているが、元来、大学時代は声楽を専攻し、歌い手を目指していたからだ。

そのあと、午後に大原をひとりで巡ってみようと予定していた私は、ベリーニ神父様のお住いが大原にあるというので、神父様の車に乗せていただいた。共に上洛していた夫も、国際会議場で皮膚科の学会に出るはずだったのに、いっしょに大原へ行くと言い出し、3人の大原珍道中がスタートした。真夏のように暑い初夏の太陽を浴び、クーラーの故障していた神父様の愛車で、さまざまな話をし、食事も共にし、大原のお寺を一つひとつ巡った。お経をあげる準備をしていた若い僧侶たちは、ベリーニ神父様に気づくと、皆、一礼しておられた。かつて大学で教鞭をとっておられたときの学生だったらしい。

その中で、私が一番大きな衝撃を受けたことがある。それは、9世紀頃からカトリックの修道院で歌われてきたグレゴリアン聖歌は、シルクロードを経て、天台宗の声明に旋律の影響を与えた、というベリーニ神父様からの教示であった。日本でグレゴリオ聖歌を教えている私の友人でさえ、知らなかったことである。

この出会いがきっかけとなり、上洛するたび、神父様に会っていただき、カトリックの音楽に関すること、典礼との関わり、神道や仏教とカトリックとの接点、日本人の信仰の在り方、ご聖体がいかに大切か、などさまざまなことを教えていただいた。

ベリーニ神父様は、亡くなられる2週間ほど前、電話口でこうおっしゃった。「私は人生の最期も美しく終えたいのです」。

一瞬、戸惑った。そして、その言葉を、イタリアのボランテティア組織ミゼリコルディアのメンバーにも伝えた。彼らはその数年前、北白川教会を訪れ、ベリーニ神父様のお世話になっていた。彼らもその言葉に感銘を受け、かなしみを感じながらもベリーニ神父様のため「祈る」ことに集中した。かつて日本にいらしたポーランド人のモンシニョールも、そのことを聞き、ローマでベリーニ神父様のためミサをたててくださった。

「美」に対する畏敬の念が強いイタリア人ならではの死生観に感動し、私はこんなふう思った。「音楽」は演奏家にとり、より美しさを求め、神に捧げる為、さらに上を求めることだ。「神」を求めることも、高く自身を律し、憐れみをもって、イエズスに身を投じて行くことだ。この両者はどこか共通しているように感じたのである。もしかすると、私がベリーニ神父様から学んだ最たるものは、その「極み」を求め続けること、であるかもしれない。

「信仰と希望、愛…その中で最も大いなるものは愛である」(一コリ 13・13)。

海の向こうの遠いイタリアの小さな村で生まれたリノ少年が、東洋の黄金の国ジパングの古くて美しい京都に住み、生涯にわたってキリストのために宣教された。それだけで、我々は胸を打たれる。

病身になられても、希望とユーモアを絶えず忘

れず、あのメガネの奥の鋭い視線と、茶目っ気のある笑顔で我々にたくさんの愛を持ってイエズスの教えを示して下さいました。

余命が少ない、何も召し上がることも飲むこともできない、ご聖体さえ頂くことができない、とドクターから申告された、とご本人から聞いた時、そして、聖母被昇天の早朝、マリア様に連れられ天に昇りました、と最期まで懸命にお世話なされた M.M.さんから、連絡を受けたとき、涙がとにかくとどめなく流れた。なぜ、こんなに泣けてしまうのか、と思うほど泣いた。

きっとそれは聖母マリアを通して、イエズスに

導かれたベリーニ神父様の愛を我々がいっぱいいただいていたからにちがいない。

愛あふれる情熱的な宣教師パードレ・リノをこの日本に送って下さったイタリアのご家族、修道会、そして神に感謝。

毎年、8月15日が巡ってくるたびに、今は聖母と共に、主の栄光の中におられるベリーニ神父様を想い、手を合わせるだろう。

ベリーニ神父様、ありがとうございました。
Grazie mille!

2022年12月8日
無原罪の聖マリアの祭日に



+++++ 編集後記

2020年の夏、余命の告知を受けた後、ベリーニ神父様は何人かの連絡先を私に伝え、ご自身ができなくなった時には連絡するように指示された。そのうちの一人が M.O.さんだった。神父様の帰天後、彼女とはすっかり仲良くなり、相談にも乗っていただいている。今回もオルガン奉仕の多忙を縫って寄稿くださった。

私はもともと研究していたエックハルト(1260?-1328)がドミニコ会司祭だったため、教会に通うようになってからドミニコ会の夜話や黙想会によく足を運んだ。中でもよくお話を聞いた米田神父様は、ドミニコ会はイエズス会のように問題を起こさないというようなことを言っておられた。なので、ベリーニ神父様と親

しくなり始めた頃、イエズス会はピンと来ないと神父様に言ったことがある。神父様は黙っておられた。ところが、神父様のことをかなり知ることになった頃、神父様は「ザベリオ会はイエズス会系」と私を横目に見やりながらおっしゃった。私は「しまった」と思った。あの時私は余計なことを言ったのだ。神父様によると、神父様が所属するザベリオ会の神学校で黙想会があるときにはイエズス会から指導者が来ていたということだった。

それどころか、神父様の帰天後、Oさんという話をしていた時におっしゃったことがある。ベリーニ神父様は神学生の頃イエズス会に入りたくてイエズス会に手紙を書いたそうなのだ。ただし返事はなく、神父様がイエズス会に入ることはなかったとのこと。私は初耳だったが、今となっては理解できる。イエズス会は20世紀多くの著名な神学者を輩出している。そのために、神父様はイエズス会にあこがれたのだろう。そして、イエズス会の教会のオルガニストのOさんにそのことを打ち明けられたのだ。神父様は、彼女が東京のイエズス会の話をする時、興味津々で聞いておられたようだ。

つまりこういうことだ。ベリーニ神父様はイエズス会の悪口を言いたい時は私に話し、イエズス会をほめたい時はOさんに話す。

誰だって、人に合わせて話をすることがあるが、ベリーニ神父様はひょっとするとそういう面が人一倍強かったかもしれない。なんてたって神父様は宣教師なのだから。パウロも言っているのではないか。「ユダヤ人に対してはユダヤ人のように…律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のように…すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです」(一コリ9・20～)。とすると、おそらく神父様がかかわった一人一人がその人にしかない神父様の思い出をおもちのことだろう。

宣教師としてイタリアから来日し、私たち信者の一人一人に、そして浄土真宗をはじめ他宗教の人々にも寄り添われた神父様。でも、そもそもの始まりは、神父様が、そして私たち信者が信じている神のひとり子が人となっておとめマリアから生まれ私たちのそばに来られたということ。クリスマスに私たちはその神祕を祝



う。イエスは今も教会の秘跡を通して、また個人的な祈りのうちに、そして、イエスを愛する人との出会いを通じて私たちに寄り添い、私たちがイエスに心を向けるのを辛抱強く待っておられる。(マリア・ヨハンナ M.M.)